焦点を合せる

夢野久作

青空文庫

イヤア。失敬失敬。李^{リー}君^{フン}というのは君かい。九大法文科の二年生……ウンウン。麻雀^マを密輸入して学資にしているんだつてね。ウム。感心感心。当世の若い人間は、ソレ位の意気が無くちや駄目だよ。ウンウン。僕は名刺を持たないが……。ハハア。王君^{ワン}から聞いて知っているか。成る程成る程。どうぞよろしく……。ナニ。日本語が拙^{ます}いから許してくれ。ナアニ。よく解るよ。それ位出来れあ沢山だよ。……。ヤ……。ドッコイシヨ……。と……。ああ忙しかった。どうだい葉巻を一本……。何だ喫^やらないのか。それじゃ僕だけ失敬する。

ちようど上^{シャン}海^{ハイ}を出る間際に王君の店から電話がかかって、君の事を頼んで来たからね。とりあえず僕の船室^{ケビン}に案内するように命じておいたんだが……。ドウかね。気に入ったかね僕の部屋は……。尤^{もつと}も気に入らないたつて、これより立派な部屋が無いんだから仕方がないがね。ハハハハ……。この船は荷物船^{カゴボート}だから、サルーンなんて気の利いたものは無いんだ。つまり荷物がお客様なんだから、人間の方が虐待されるんだ。堂々たる海牛丸、二千五百噸^{トン}の機関長が、コンナ部屋に跣^かま^がっているんだから推して知るべしだろう。ハハハ……。迷惑だろうが長崎に着くまで、僕の寝台^{ベッド}に寝てくれ給え。ナアニ僕は滅多^{めった}にこの部屋

で寝ないんだ。機関室の隅ツコにモウ一つ仕事部屋があるからね。毛布も枕もそこに置いて在るんだ。君のは今持つて来さすからね。書物は無いが雑誌の古いのなら在る。持つて来させようか。

ウンウン。

実は早く君の様子を見に来ようと思つたけれども、水先案内の野郎が乗っているうちは、機関室の方が、忙しいのでね。おまけに今日の奴は知らない奴だったが、新米と見えて、矢鱈やたらに小面倒な文句ばかり並べやがったもんだからね。ナアニ、ここいらの水先案内なら、こつちが教えてやりたい位なんだが、新米でも何でも、水先を乗せるのが規則なんだから仕方がない。やつと今さつき水蒸汽ラッチで引上げて行きやがった。君見たろう……ウン……。もうこつちのもんだ。エコノミカル・スピードでブラリブラリと長崎へ着いて、ダンブロの荷物をタタキ上げれば、後は南洋まわりと相場がきまつている。こう排日が非道ひどくちや、荷物一つ動かないからね。ナアニ。済まない事があるものか。コンナ船に乗ったら、ソナ小面倒こめんどうな気兼ねは一切御無用だよ。国際的なルンペン船だからね。金儲けなら支那軍に売渡す鉄砲でも積込むんだ。怖いのは南支那海の三角波だけだよ。ハハハハ……。ナニ？ 船賃？ そんなもな要らないよ。王君がそう云やあしなかつたかい。ウン。云つた

けど気の毒だ。馬鹿な。納めるんなら十や二十の端はした金かねじゃ駄目だよ。勿もつ体たいなくも麻雀の密輸入じゃないか。百や二百じゃ承知しないぜ……ナニ……それじゃ算盤そろばんに合わない。それ見ろ、ハッハッハ。僕の好意で乗せてつてやるんだ。他ならぬ王君の頼みだからね。上陸してから鰻うなぎでも奢おごり給え。それで沢山だ。ハハハ。お礼には及ばないよ。

それよりもドウだね。一つ機関室を見に来ないか。君と話しながら仕事をしよう。何も話の種だ。ホントウのドン底の地獄生活というのは、コンナ檻ぼろ籠かご船の機関室だつてことを、世間ではあまり知らないだろう。船底一枚下は地獄とか何とか云うけど、地獄の上に浮いた地獄があるなんて事は、船乗り以外には誰も知らない筈だからね。尤もつとも知られた日にはコチトラの首が百あつても足りないがね。ハハハ。何も怖いことはないよ。閻魔えんま大王の僕が御案内するんだから……。

ナニ……この部屋かい。大丈夫だよ。この鍵を預けとくからキッチンと掛けておき給え。鍵は君が持っていた方が便利だろう。部屋を出るたんびに締りをしとく事だ。船員なんてな泥棒みたいな奴ばかりだからね……その鞆かばんは寝台の下にブチ込んでおき給え。ウン。鍵を掛けて封印して在るね。それなら大丈夫だ。中味の麻雀が船員に見付かると五月蠅うるさいからね。何とかカンとか云やがつて、一杯飲ませなけあ納まらないんだ。

……こつちへ来たまえ。外はモウ涼しいね。二百廿日も無事平穩か……サツキの小蒸汽の煙がまだ見えてるぜ。引潮時だもんだから港口で流されているんだ。君には見えない。成る程。その眼鏡は紫外線除けかね。イヤに黒いじゃないか。そいつを除けば見えるだろう。……見えないかい。慣れないせいだよ。船乗りになると遠い処の方がハッキリ見えるんだからね。アハハ。ヨタじゃないよ。

一体君はどうして王君と識合いになつたんだい。ドウセお楽しみ筋だったのだろう。ハハハ。ナニそうじゃない。両替をするつもりで王君のレストランへ這入つた。ウム。あすこのビフテキは安くて美味いからね。国際的に評判がいいんだ。ああそうか。君は初めてだったのか。這入つてみて立派なのに驚いた。当り前だ。あれ位の店はマルセルあたりにもチョット無いよ。表口はお粗末だがね。それよりも綺麗な女が大勢居たろう。ウン。引っかけてみたかい。ハハハハ。引っかけてみればあよかったのに。昼間だつて構うものか。高級船員が行く処だからね。地階に立派な設備が出来ているんだ。技巧なら上海一だつて云うぜ。僕はあすこの常連なんだ。五六百両借りがあるがね。王君は大きいから千両位まで貸すよ。尤も女に馴染が出来なくちや駄目だがね。ハッハッ。チョット失敬して便所へ行つて来る。君もつき合うか……。

ウン……そんな事は全く知らなかったのか。無理もないね。ウンウン、麻雀買いの手筋
 なら何でも知っている。……この頃は蘇州そしゅうへ行つて自分で指図をして日本人向きに彫ら
 せる。……上海のはいけないのかい。フウン。彫りは派手だけれども牌パイの出来は蘇州の方
 がいい……フウン。支那人と日本人の好みが違うかね。僕はカラツキシ素人しろうとなんだが。
 フウン。あの団子みたいな模様と、鳥の恰好が、特に日本人は八釜やかましい。そんなものかね
 え。成る程。……日本内地では麻雀賭博が流行り出したかね。そこで密輸入の上物じょうものが
 売れ出した。つまり日本の麻雀が本格になりかけているんだね。今に支那式のルールが復
 活する……そうかねえ。とにかく面白いもんらしいね。ウンウン。それで蘇州へ行つて麻
 雀を買い込んだ。ウンウン。帰りに小銭こせにが無くなつたから切るつもりで、王君のレストラ
 ンへ偶然に這入つた。料理を一皿註文して珈琲コーヒーを飲んでいたら……酒は駄目なのかい君
 あ……そいつは話せんねえ。ダイナジンで奴を一杯御馳走しようと思つていたんだが。ジ
 ンの中へダイナマイト……つまりニトログリセリンが割つてあるんだ。トテモいい心持ち
 に酔うからね。ケープタウンで作り方を教わつたんだが。……ウンウン。そこで珈琲を飲
 んでいたら女が大勢タカつて来た。フウン。君はナカナカシヤンだからなあ。おまけに貴
 公子然としているからなあ。ハツハツ。御愛想じゃないよ。ウン。それでどうした。無理

矢理に奥へ引っぱり込まれた。アハハハ。上玉じょうたまと見られたな。そこへ王君が出て来て最高級の御挨拶をした。アツハツハツハ。コイツは大笑いだ。王公ワンこう一代の傑作だろう。滅多めったにお客を見損なう男じゃないがなあ。それからどうした……。

それから女どもを遠慮してもらって、王君と差向いになつて事情を打ち明けたというのか。ポケットを裏返して見せた。ハツハツ。そんな事だろうと思つた。正直だなあ君あ。ウンと飲んだり喰つたりしてから打明ければよかつたに……ブチ殺されるもんか。王君は却かえつて御馳走をして帰すよ。脅喝に來た奴でも溫柔わとなしく抓つまみ出すばかりだからね。だから評判がいいんだがね。ウンウン。それから王君が同情してこの船を教えてください。フ——ン。君の親孝行に同情して教えてください。重慶にお母さんを一人養っている……タツタそれだけの理由かい。本当の事を云つてみたまえ。隠したつて駄目だよ。この次に王君に会えばわかるんだ。ナアニ、どこへも聞こえやしないよ。機械の音が八釜やかましいから……ナニイ……何だつて……。

ハハハ。ナアル程。そこで王君は大学をやめて、レストランのボーイになれて君に勧めたア?……アツハツハこいつあイヨイヨ傑作だ。二階の婦人専門のサルーンに出れば、最低千円のチップは請合うと云うのか。いかにも読めたわい。王公一目で君のスタイルに

参つたんだね。学生にしちやスマート過ぎるからな。そこで都合よく奥に引っぱり込んだ。やつぱり王公は眼が高えや。ハハハハ。今度上海へ来たら是非モウ一度寄ってくれって？……ナカナカ執念深いな。……ナニ……今のチップの千円問題は僕に云っちゃいけないって？ ハハハ馬鹿にしてやがら。僕の俸給と桁違いだもんだからソナ事を云うんだ。行き届いた男だが、しかし中華人一流の要らざる心配だよ。まさか僕が雇われに行けあしめえし。ハツハツハツハツ……。

サア来た。……ここが機関室だ。この垂直の鉄梯子を降りるんだ。油でヌラヌラしているから気を付け給え。落ちたらコツパ微塵だよ。ウンなかなか君は身が軽いね。運動をやっているんだね。スキーにダンスか。そいつあモダンだ。女が惚れる筈だ。オット危ない……。

こつちへ来たまえ。……聞えないかい。オイオイ。こつちへ来たまえったら。このベルトに触らないように気を付けたまえ。

これが僕の仕事部屋だ。この椅子に掛け給え。アツトツト……。濡れてたかい。イヤ失敬失敬。暗いからわからなかった。茶瓶か何かそこへ置きやがったな。オヤオヤ。お尻がビシヨビシヨになつちやつたね。アツハハ。茶粕が付いてらあ。仕方がない。この鉄

椅子に掛け給え。そのうちに乾くだろう。……見たまえ。ちょうどマン中の汽罐ボイラーが真正面に見えるだろう。忙しくなるとこの部屋に来て仕事を睨にらむんだ。時化しけの時なんぞは一週間位寝ない事があるんだぜ。

オーイ。誰か来い。……聞こえないか……君はチョットその呼鈴ベルを押してくれたまえ。

……何だボン州か。ウン。コック部屋に行つて珈琲と菓子を買つて来い。普通のじゃ駄目だぞ。船長おやじが上海で買込んだ奴があるんだ。コック部屋に無けあ船長室に在る筈だ。そいつを搔かつ払はらつて来い。なぐられるもんか。愚図ぐずぐずぬ愚図吐ぬかしたら俺が命い令いたつけと云え。船長おやじには貸しがあるんだ。……行つて来い……。

……どうだい。機関室つてものは這入つてみると存外荒つぽいだろう。聞えるかい。僕の云う事が。きこえる……ウン……ボン州つてな紳名あだなだよ。……仏蘭西語フランスの挨拶かと思つた？……アハハハ大笑いだ。あの垂直の鉄梯子を降りたら、ドンナ人間でも本名が無くなるんだ。地獄の一丁目だからね。みんな戒名かいみょうで呼び合うのが習慣になつていゝんだ。銀行泥棒上りが銀州、強盗前科が腕公わんこう、女殺しがエテ公、凡クラがボン州……モウ暫くすると君だつて戒名を附けられるかも知れない。黒眼鏡とか何とかね。ハツハツハ……ナア二。みんなここへ来れあ年季を入れるんだよ。何でも白状しちまうんだ。娑婆しゃばへ出れあ

寿命の無い奴ばかりだからね。首と釣り換えて働きますという意味で、綺麗サツパリと白状しちまうんだ。だから僕の事を閻魔様と云うんだ。がそんな奴でないと、イザとなった時にタタキまわしが利かないから妙だよ。……見たまえ。あれが最旧式の宮原式ボイラーなんだ。二三十年前に出来た骨董品だが、博物館あたりへ寄附しても相当喜ぶシロモノだよ。ハツハツ。ナアニ大丈夫だよ。爆発なんかしないよ。出来は古いがガツチリしているからね。安全弁があんなに白いスチームを吐いているだろう……ブーブーいつてるのが聞えるかい。ウン……見えるけど聞えない……慣れないからだよ。

アツ……蓋を明けた。眩しいだろう。

ボイラー
汽罐の蓋を明けたんだよ。まるで太陽だろう。アハハ。もうあんなに白熱しているんだからね。あれで千二百度ぐらいのもんだろうよ。それでもあの中へ人間一人ブチ込んだら、五分間で灰も残らないよ。美味そうな臭いだけは残るがねハツハツハツ。

人間をブチ込んだ事があるかって……あるともさ。人間ばかりじゃない。品物だって何だって面倒臭いものはミンナ打ち込むんだ。この間なんぞは鉄砲を積んで呉淞に這入りがけたら、その間際で船員の中に、スパイが二人混っている事を発見したから、文句なしにブチ込んでくれたよ。ナアニ途中で波に漂われたと云いやあソレツキリだからね。

……ヤ……ちようど茶が来た。一杯飲んで行き給え。序ついでにモウすこしすると面白い事が初まるから見て行き給え、今にわかるよ。トテモ面白い。簡単なバクチなんだ。見れば解るよ。

ハハハ……心配しなくともいい。地獄の珈琲だつて麻酔薬まやくも何も入つてやしないよ。君を眠らして、麻雀の十箱やそこら頂戴したつて仕様がなからう。第一君を殺やるつもりならワザワザこんな処まで引張り込みやしないよ。学生の癖いきじに意気地いけぢが無いんだなあ君や。ハハハハ。まあ珈琲を一杯飲み給え。スマタラ製だが非常に芳香かおりが高いんだ。度胸が据つて僕の話が面白くなるだろう。コンナ世界も在るつて事が解れば、将来キツト参考になるよ。トニカク徹底しているんだからねえ機関室の地獄生活は……。

成る程なあ。君等にとつちや学校を卒業するのが目下の急務だろうよ。最早もはやジキ試験が始まる……故郷にはお母さんが待つているか。フウン。そうかそうか。まあシツカリ遣り給え。しかし試験そうろうの候のつていうけど、今の学校の試験なんか甘いもんだよ。僕が機関長になつた時の体験を話したら身の毛が竦よだつだろうよ君等は……まあ聞き給え……モウ船室ケビンには用は無いだらう。ナニ、書物を読みたい。書物なんかは大概にしとくがいいね。学校で習つた事なんか実際の役に立ちやしないよ。理窟通りに機械が動くもんなら機関長は要

らない。学者の思う通りに世の中がなるものなら、ボルセビキの理論は一と通りで済むんだ。ナカナカ学者だろう。ハツハツ。

オイ。ボン州。チョット来い。モウーパイ茶を入れて来い。今度は紅茶だ。俺のはウイスキーを割って来るんだぞ。それからその扉ドアを閉めておけ。八釜やかましいから……。

どうだい。こうして扉ドアを閉めとくと機械の音がウツスリしか聞えないだろう。扉ドアが厚いからね。しかしコンナに軽い騒音でも、機械のどこかに故障があると、直ぐにこつちの頭にピインと来るんだよ。故障の個所までチャント解るから不思議だろう。ナアニ。永年の経験さ。この部屋で寝ていると夜中に何か知らんハツとして眼を醒ます。ハテ。何で眼を醒ましたのかと思つて、ボンヤリしていると果せる哉かなだ。コンナ風に雑ごちゃごちゃ然聞えて来る騒音の中のドレか一つが起している。ズット奥の小さなピストンのバルブがおかしいな……とか何とか直ぐに気が付く。そんな小さな音に眼を醒ます筈はないと思うかも知れないが、不思議なもので、機械のジャズが順調に行つていゝうちはグツスリ眠つていゝが、すこし調子が変わるとフツと眼が醒める。同じ船に長く乗つていゝと船の機械全体が、自分の神経みたいになつてしまふんだね。船が黒潮に乗ると同時に、運転手がポツカリと眼を醒ますようなもんだ。

まだ驚く話があるんだ。

今君が見たあの大きな汽鐘ボイラーね。あの正面の電球の下に時計みたいなものが在って、指は針りが一本ブルブル震えていたろう。あれが汽鐘ボイラーの圧プレシユア力ゲージ計ンダなんだが、あの圧力計ゲージの前に立つて、あの指針はりが、二百封度ポンドなら二百封度の目盛りの上に、ピツタリと静止しているのを見た一瞬間に、この指針はりはこれから上るか……下るかっていうことがピンと頭に来るんだ。静止している指針はりがだよ。そいつがピンと来る位の頭にならなくちゃ、一人前の機関長たあ云えないんだ。同時に圧力がコレ位しか上らないところを見ると石炭が悪いんだな……とか……どこかに故障があるんだとかいう直覚が来る。向うの港に着くまでに石炭が足りるか足りないかといったような問題まで、同時にピーンと来るんだから、あの指針はり一本がナカナカ馬鹿に出来ないんだ。ソウ……第六感とでもいうかね。

無論そこまで来るには僕も苦労したもんだよ。まあ聞き給え……。

……オーイ……這入れえ……。

……ヤツ来た来た。魔法瓶テルモスに入れて来たな。ボン州の癖に気が利いているじゃねえか。

このウイスキーは誰のだ。何だ船長のか。イヨイヨ気が利いているぞ貴様は……勿もつ体たいな
くもK、O、K、じゃねえか。ステキステキ。どうだいチョツピリ、ウイスキーを入れよ

うか。ナニ。奈良漬に酔う？ ナカナカ日本通だね君や。それじゃカステラを遣り給え。上海から逆輸入の長崎名物だ。吾輩の話の聞き賃だ。ハハハハ……オイオイ……野郎。あとを閉めねえか。馬鹿野郎……。

イヤ。全く久し振りにコンナ話をするがね。吾輩が機関長の試験を受けたのが二十一年だった。イヤア君も二十一かい。そいつあ奇遇だね。ハハハハ。ところでソイツが満点試験と来ているから凄いだらう。ドレ位凄いか話してみなくちや解るまいがね。

何しろこつちは、無けなしの貯金に借金の^{うわぬ}上塗りした何十円也を試験料としてブチ込んでいる一方に、船乗片手間の独学と来ているんだから絶体絶命だ。高等数学の本なんかテ^{かた}ンデわからない奴を、片ツ端^{ばし}から一冊分丸語記さ。そんな無茶をやった事があるかい。無いだらう。トテモお話にならないんだ。兵庫の下宿の天井から、壁から、襖^{ふすま}から、障子^{しょうじ}から、電燈の笠まで、公式を書いた紙をベタベタ貼り散らして寝床の中から眼を開ければ、直ぐに眼に付くようにしている。語記した奴は引つpegして、新しいのを貼るといふ寸法だ。下宿の婆さんが驚いて、コンナに沢山にまあ。これは及第のおまじないですかつて聞くん^のだ。成る程おまじないに違いないね。丸めて嚙^のんでしまいたいくらい大切なおまじないだからね。ハハハ。

それから当日試験場へ行くと、初日は筆記試験ばかりだったが、コイツは兎も角も満点を取って帰ったと見えて、明日の試験に出ろという通知が夕方下宿に届いた。

ところで翌朝、勢い込んで試験場に来てみると驚いたね。七十何人居た受験者が、タツタ二人しきや居ないんだ。何かの間違いじゃないか知らんと思つて一寸キヨロキヨロしたもんだよ。ナアニ。みんな振り落されたのさ。ホントウの満点試験だからね。綴字が一字違つていてもペケなんだから凄いや。七十何人、試験料丸取られさ。これがお上の仕事でなけあ、金箔付きのパクリだろう。

僕と一緒に居残った奴は、島根県の何とかいう三十ばかりの鬚男^{ひげおとこ}だったが、広い教室のズツト向うとこつちに離れて製図を遣るんだ。……お互に顔を見交^{みかわ}して泣き笑いみたいな顔をし合つたつけ。……ところが翌る日行つてみると、今度はそいつがノックアウトされてる。つまり一番年の若い僕だけがタツタ一人残った訳だが、心細いの何のつてお話にならない。冥途^{あのよ}の入口に一人ポツチで来たような気もちだ。しかし試験官は、それでも遠慮なんかミジンもしない。一匹もパスさせなくたって構わないんだから平気なもんさ。口頭試験で百三十ばかりの問題を立て続けにオツ冠せて来る。むろん片ツ端から即答さ。時計を睨みながら二三十秒ぐらい待つてくれるだけで、一分と過ぎたらその場で落第の宣

告だ。恐らく僕の顔には血の気が無かつたろうと思う。それでもヤツトの思いで汗を拭き拭き受け流して行くうちに試験官がパツタリと帳面を閉じたから、落第じゃないかと思つてハツとしていると、その顔を見ながら試験官の奴ニツコリしやがってね。イヤ、御苦労でした。成績は満点です。あちらの室で茶を飲みましょう。……と早口で云つた時には、思わずポオーツと気が遠くなつたね。しかし、それでも嬉しかったから尻尾を振り振り、浮き足でクツ付いて行くと、廊下を一曲りした処の空部屋に僕を連れ込んで、熱い渋茶を一パイ御馳走した。その序に室の中をグルリと見まわすと、試験官の奴モウ一度ニヤリと笑つたもんだ。

「この室に石炭が何噸、詰まるでしようかね」

と冗談みたいに吐かしおつてね……しかも、その顔付きたるや、断じて冗談じゃないんだ。たしかにまだ試験の中らしい面構えをしてケツカルんだ。考えてみるとサツキ満点を宣告した時には、ただ御苦労と云つただけで、お芽出度うとは吐かさなかつた。チヨツクラ油断させておいて、不意打ちにタタキ落そうという寸法なんだ。こんなタチの悪い試験に引つかかつた事があるかね……恐らく無いだろう。

そう気が付いた刹那に僕はモウ一度気が遠くなりかけたね。そいつを我慢すべく熱い茶

を一杯グツと嘸み込むと、破れカブレの糞度胸くそどきようを据えたもんだ。

「そうですねえ。六十噸トシも這入りますかね」

と冗談みたいに返事してやったら、試験官奴め、眼を丸くしやがって、

「へエ。そんなに這入りますかね」

と吐かしやがった。おまけに附け加えて、

「室へやの容積というものは見損ない易いものでね。誰でも初めて船に乗って、石炭を積むと
なると、この見込みが巧く行かないので、下級船員から馬鹿にされる事になるのですが…

…ハハン…」

と腮あごを撫でおった。…ニアニ。親切でソナナ事を云うもんか。ドギマギさせようとい
う策略に違いないんだ。…へエ。それじゃ五十噸トシぐらいですか…とか何とか、お付き
合いにでも云おうもんなら…ハイ。待ってました。九十九点九分九厘で落第…と来る
んだろう。土に嘸かじり付いても試験料をパクリ上げようという腹なんだからヒドイよ。そ
ん時には流石さすがの僕も、思わずグツと来てしまったね。何しろ若かったもんだから…
棒ぼうめえ。どうでもなれという気になったもんだ。

「…ええ…しかし六十噸というのは試験の解答ですよ。天井までギツチリの勘定です

が、しかし實際をいうと、この問題は非常識ですね。本当にこの部屋に、それだけの石炭を詰め込んだら、壁と床が持たないでしょう。エへへへへ……」

と冷やかし笑いをして見せたら、試験官の奴、塩しよっぱい面つらをして睨み付けたと思うと、プリプリして出て行きおった。そこで僕も土俵際で落第したもんだと諦めて、その晩は久し振りに酒を呷かぶってグツスリ寝込んでいるうちに、いつの間にか夜が明けたらしい。下宿の婆さんがユスブリ起して「モウ九時だつせ。お手紙が来とりまつせ」と云うんだ。むろん落第の通知だろう。見たつてドウなるもんか。勝手にしやがれと思ひ思い、何だか気になるから開けてみたら、豈あにはか計らんやだ。試験官の直筆だったが、及きゆうだい第も及第。とりあえずお芽出度う存ずる。就つては目下、当港（神戸）に停泊中の病院船、十字丸、三千二百噸の機関長の補充として御乗船願いたいが、御意嚮いこうは如何いかでしょうか。月給、百何十円。噸うんぬん云々……という孫悟空みたいな話だ。そんな時に又、頭が又シーンとしちやったね。明治四十年頃の百兩といったら大したもんだ。幅が利くにも何にもドエライ出世だ。おまけに若い機関長のレコード破りというのが評判で、アタリ八方、持てたの候のつてお話にならなかつたが、実をいうとコイツが悪かつたんだね。若い時の苦勞は買つてもしろうと云う位だ。あんまり早くから立身したり、世間に持てたりするのは碌ろくな事じゃあないんだ。

お蔭でスツカリ身体をヤクザにした上に、今の十字丸に乗ってから一年目に、瀬戸内海で推進機スクリュウを振り落した。船に乗る時には十分に機械を調べて受取ったつもりだったが、推進機クリユウまでブン擲なぐっていなかったのが運の尽きだった。尤も瀬戸内だから助かったもんだ。ケーブ沖か何かだったら、南極へ持つて行かれたかも知れない。

……コイツがケチの付き初めで、それ以来僕の乗る船に碌ろくな事はない。新式タービンのパリパリが、ビスケー湾の檣舞台ひのきぶたいでヘタバツたり、アラスカ沖の難航で、陸地おかが鼻の先に見えながら、石炭が足りなくなったりする。そんな時には石炭の代りに、メリケン粉を汽罐かまにブチ込んで、人間も船体ふねも真白にしてしまったものだがね。もちろんこつちの手落ちだった事は一度もないんだが、不思議に運が悪いんだ。とうとうコンナ瓦落船がらくたぶねに乗って、骨董みたいなお汽罐かまの番をるところまで落ちぶれて来た訳だがね。ハツハツ……しかし、お蔭で君達の喜びそうな冒険を、イクラ体験して来たか知れやしない。今サツキ話しかけた推進機スクリュウの一件を、モウ一度印度洋インドで蒸し返した時なんぞは、今思い出してもゾツとする目に会ったね。ちょうど歐洲大戦のシヨツ端ぼなで、青島チンタオから脱け出した三千六百噸トイツの独逸巡洋艦エムデンが、印度近海を狼みたいに暴れまわっている時分のことだ。

大阪商船の濠洲メルボルン通いで、三洋丸という快速船はやいのがあった。七千噸ばかりの客船マイルだった

が、コイツが航路を切り変えて、一かバチかの欧羅巴行きを思い立ったもんだが、今のエムデンを怖がつて行くものがないというので、とりあえず僕が器械の方を引受けて、新嘉坡まで来たのが忘れもしない、大正三年の九月の十五日……暑い盛りだ。あすこでポートサイドからマルセル直航の男船客ばかりを三百五十何人と上等の紅茶を積めるだけ積んだ訳だが、コイツが無事に地中海へ這入れれば、むろん大儲けさ。欧羅巴全体が敵も味方も咽喉を鳴らして待っている極上飛切りの紅茶バツカリと、金すくを通り越したお客バツカリ満載しているんだからね。紀州の蜜柑船どころの騒ぎじゃない。三井の遣る事は凄いや……そこで聯合艦隊の無電を受けながら、勇敢に印度洋のマン中目がけて乗り出してみるとドウダイ。陸影を離れてから間もない三日目の、二十三日の朝早く、無電技手が腰を抜かしたまま船橋から転がり落ちて来た。……昨夜の真夜中にエムデンが突然、向う岸のマドラス沖に現われて、石油タンクの行列を砲撃した。エドワード砲台が泡を喰つて、闇夜の大砲をブツ放したが、その時には最早エムデンは居なかつた。三洋丸はそのまんまで行けば、そろそろエムデンの逃路にぶつかるとも知れない。気を付けろ……といったような無電が、ビーツ……ビーツと這入つて来たと言うんだ。

イヤモウ……みんな青くなつたの候のつて……覚悟の前とか何とか、大きな事を云つて

いた船長が、日本人の癖にイの一番に慌て出して、フルスピード 全速力で シンガポール 新嘉坡へ ひつかえ 引返すと云い出したもんだ。つまりエムデンの死に物狂いのスピードが、先ず二十七八節ノットで、三洋丸のギリギリ決着が二十三四節ノットだから、見付かったら最後、物が云えないという算盤そろばんを取つたんだらう。しかも、それ位の算盤なら何もわざわざ、印度洋のマン中まで出て来て はじ 弾くが必要ものはないのだ。忠兵衛さんじゃあるまいし。大阪を出た時からチャンと見当が付いている筈なんだが、要するに今の無電と一いっしょ所に、新規ま時き直しの臆病風が、船長の襟元からビービービーツと吹つ込んだんだね。

そいつを チーフメート 一等運転手が腕うでずくで押し止めようとする。そいつを又、乗客の中に居た、ア 愛イルランド 蘭の海軍将校上りが感付いて、船中に宣伝して廻ったから堪たまらない。碧眼あおめだま玉をギョロ付かした乗客が、吾われも吾われもと船長室へ押しかけて、土気トクパ色になつた船長を取巻いて、ドウスルドウスルと小突きまわす。一等運転手と事務長が、仲に這入まごまごつて間誤まごまご誤する。船長の名前は勘弁してくれだが、国辱にも何にもお話にならない。エムデン艦長といひコントラストが出来上つた。……結局、そんな連中で、寄つてタカつて、一か八かのコンニャク押問答をフン詰つまらせたあげく、僕がその評議のマン中に呼び出される事になつたもんだ。

……今以上にスピードが出せるか出せないか。それによってスエズへ直航するかしないか……又は新嘉坡へ引返すにしても、荷物を棄てるか、棄てないかを決定する……。

という問題を持ちかけて来たから、僕は占めたと思つたね。ここいらで一番、身代を作つてくれようかな……序に毛唐の胆つ玉をデングリ返してやるか……という気になつて、ニツコリと一つ笑つて見せたもんだ。

「お前さんは運のいい船に乗り合わせたもんだ。一万磅呉れるなら、速力を今よりも五節だけ殖やしてやろう。むろん荷物は今のマンマで結構だ。モウ五節速くなつたら、いくらエムデンでも追付かないだろう……しかし物には用心という事がある。万一お前さんが、五節でもまだ足りないと思う場合にブツカルような事があつたら、ソレ以上一節毎に、一万磅ずつ、奮発してもらいたい。それでも足りなけあ紅茶を棄てる事だ。全速力三十一節まで請合う。それでも追付かなけあ諸君が海へ飛び込むだけの事だ」

とチョツピリ威嚇してやつたもんだが、毛唐の物分りの早いには驚いたね。チョツト別室で相談したと思う間もなく、シャンとした奴が五六人引返して来て、二千磅の札束を僕の前に突き出した。むろんアトの八千磅はポートサイドへ着いてから渡すという、立派な証文付きだったが、流石の僕もソン時には、チョツト頭が下がつたよ。何しろ大きな銀

行が、ポケットの中でゴロゴロしていようという連中だからね。助かりたいのが一パイだったのだろう。船長や運転手までホツとしたような顔をしていたつけが、可笑しかったよソレア。何はともあれエムデン様々々と拝みたくなくなったね。

……というのはコンナ訳だ。

実をいうと三洋丸ぐらゐの機械を持つていれあ、速力を五節増すぐらゐの事は屁の河童なんだ。新しい機械の力はかなり内輪に見積つてあるもんだからね。……と云つたつて、むろん船長や運転手なんかに出来る芸当じやない。いわば僕一人の専売特許かも知れないがね。ずっと前、南支那海で海賊船がノサバツた時に、万一の場合を慮つて、何度も何度も秘密で研究して、手加減をチャント吞込んでいたんだから訳はない。僕は機関室へ帰ると直ぐに、汽罐の安全弁の弾条の間へ、鉄の切つ端を二三本コツソリと突込んで、赤い舌をペロリと出したものだ。

タツタそれだけで一万磅の仕事になつた訳だが、何を隠そうコイツは立派な条令違反なんだ。発見かつたら最後、機関長の免状を取上げられるどころじやない。ドエライ罰金を喰わせられた上に、懲役にブチ込まれる事になるんだから、ソレ位のねうちはあるだろう。況んや何百人の生命と釣りかえの問題だからね。

しかもタツタそれだけの手加減で、汽鐘ボイラーの圧力プレスがグングンせり上って、圧力計ゲージの針がギリギリ一パイのところまで逆立ちしてしまった。同時に推進機スクリュウの廻転がブルンブルン高まる。速力スピードが出たどころの騒ぎじゃない。素人が見たら倍ぐらい早くなったように思える。両舷を洗う浪の音がゴオオ……ツ……ゴオオオ——オオツと物凄く高まったもんだから、デツキに立っていた連中はスツカリ安心してしまつたらしいね。今までの心配疲れも出て来たんだろう。一人一人に船室ケビンへ歸つてグーグー寝てしまつた様子だ。そこで機械と睨めつくらをしていた僕も、この調子なら大丈夫と思つて、椅子に腰をかけたままウトウトしていた……までは良かったが……アトが少々面白くなかつた。

その翌る朝のまだ薄暗い中うちの事だ。ポートサイドで札ピラを切っている夢か何か見ている最中さなかに、今の推進機スクリュウの中軸ななはになっている、一番デツカイ長い円棒シャフトが、中途からポツキリと折れたもんだ。急にスピードを掛けた馬力やつが、イの一番に円棒シャフトへコタえたんだね。アツハツハツハツハツ……そんな時には流石さすがの吾輩も仰天したよ。折れると同時にキチガイみたいイに廻転し出した機械の震動が、白河夜船のドン底まで響き渡つたもんだから、ウンもスンもあつたもんじやない。てつきりエムデンに遣られてゴースタンか何か掛けたものと、船長初め思い込んだらしいんだね。アツという間に船の中が、ワンワンワンワンと

い。實際、傍へ寄つてみたまえ。これが人間の作ったものかと思うと、物が云えなくなる位ステキなもんだぜ。そいつを索条ワイヤや鎖チエンでジワジワと釣り上げるだけでも、チョットやソットの仕事じゃない。おまけにあの大揺れの中を、二日ばかりで荷物を積み換えて、ヤツト少しばかりお尻を持ち上げさせた船のスクリュウの穴の中へ、ソーツと押し込もうというのだから、無理な注文だという事は最初からわかり切っているだろう。船渠ドックの中で遣つても相当、骨の折れる仕事を、沖の只中で流されながら遣ろうというのだからね。……のみならず今も云う通り、七八千噸トンの屋台を世界の涯まで押しまわろうという鋼鉄はがねの丸太棒だ。ピカピカ磨き上げた上に油でヌラヌラしている奴だから、手がかりなんか全然まるで無いんだ。ワイヤとチエンで、どんなに緊しつかり縛り付けといたつて、一旦いちど迂まがり出したとなれば、人間の力で止める事が出来ない。一分ぶ迂まがつたら一寸すん……一寸迂まがつたら一尺といった調子で、アトは迂まがり放題の、惰力の附き放題だ。遠慮も会えしやく釈やくもあつたもんじゃやない。ズラズラズラズラツと迂まがり出したが最後の助。鉄の板でも何でもボール紙みたいに突き破つて、船の外へ頭を出すにきまつている。そのまま、ズルズルズツポリと外へ抜け出してしまつたら、ソレツキリの千秋楽だ。取り返しが付かぬどころの騒ぎじゃない。飛び出しがけの置土おきみや産げに巨大な穴でもコジ明けられた日には、本家本元の船体が助からない。シャフトのア

トからブクブクブクと来るんだ。……ハツハツどうだい。わかるかね。シャフトの素晴らしさが。ウン。わかるだろう。コンナべらぼう籠棒な苦心した機関長はタントいないだろうと思
うがね。

ところが世の中は御方便なものでね。險けん呑のんな仕事なら、自慢じゃないが、慣れっこになつてゐる吾輩だ。尤も吾輩が乗つたからシャフトが折れたのかも知れないがね、ハツハツ。前以て、そんな間違いないように、二重三重に念を入れて、不眠不休で仕事をしたから、ヤット一週間目に蒸スチーム汽を入れるところまで漕こぎ付けたんだが、その間の騒動つたらなかつたね。一万磅ポンドなんか無論立消えさ。糞くそでも喰くらえという気で、押し切るには押し切つたが、実のところ寿命が縮まる思いをしたね。……乗客の方は無論の事さ。その時分に印度洋のマン中で、一週間も漂流するなんて事を、ウツカリ最初から云い出そうもんなら、気の早い奴は身投げぐらい、しかねないんだ。毛唐なんて存外、気の小さいもんだからね。すぐに思い詰める奴が出て来るんだ。その証拠に、明日あした明日で云い抜けながら仕事をして行くうちに、三日ばかり経つたら乗客が、一人も寝なくなつてしまつた。みんな神経衰弱にかかっちゃつたらしいんだ。来る日も来る日もエムデンの目標になつて浮いてゐるんだから、考えて見れば無理もないさ。こつちも無論エムデンが怖くないことはなかつ

たが、怖いって今更ドウにも仕様がない。タツタ一本しか無い予備シャフトを無駄にしたらそれこそホントウに運の尽きだからな。

そんな訳で、最初から腹を定めて仕事をしたお蔭で、ヤット船が動き出すには動き出したが、今度はモウ速力スピードを出さない。八千磅ポンドの証文をタタキ返して、安全弁セーフティバルブの鉄片を引っこ抜いてしまった。すると又、そのうちに、乗客の中でも一番航海通の海軍将校上りが……サツキ話した慌て者さ……そいつが手ヒドイ神経衰弱に引つかかってしまった。機関長を殺せとか何とか喚わめきやがって、ピストルを振りまわすので、トテモ物騒で寄り付けない。……とか何とか事務長が文句を云いに来たから、僕は眼たまの球の飛び出るほど怒鳴り付けてやった。

「……訳はない。そいつを機関室ここへ連れて来い。汽罐かまへブチ込んでくれるから……いくらか正気付くだろう」

と云ってやったら事務長の奴、驚いて逃げて行つたつげ。ハツハツハツハツ……。
 オーイ。這入れえ。オイオイ。這入れえ……。

何だ。ボン州か。何の用だ。ナニイ。チツトモ聞えない。こっちへ這入れ。そうしてその扉ドアを閉めろ……ちつとも聞えない。

どうしたんだ。……ウンウン……検査が済んだのか。恐ろしく恐ろしく手間取ったじゃないか。ウンウン 真鍮張りのトランクの中に麻雀八筭か……牌の中味は全部剝抜いて綿ぐるみの寶石か……古い手だな……。

オットオット。待ち給え李君……今頃ピストル何か出したって間に合わないよ。君の背後の寝台の下に居る奴がスイッチを切ると、今君が腰をかけている鉄の床几に、千五百ボルトの電流が掛かるんだ。そのために君のお尻を濡らしておいたんだが、気が付かなかつたかい。ハハハ……。

先刻から冗く説明しているじゃないか。あの垂直の鉄梯子を降りたら運の尽きだと……ハハハ。解つたかい。わかつたらモウ一度腰を卸し給え。大丈夫だよ。まだ電流は来っていない。君を黒焦げにしちやつちや、元も子もなくなるからね。ね。解つたろう。

君はこの船を普通の船と見て乗った訳じやなからう。最初から秘密があると睨んで虎穴に入ったんだらう。序にこの船の秘密を看破つてやれという気になってここまで降りて来たのは、いい度胸だったかも知れないが、そいつがドウモ感心しなかつたね。

ナニ。あの寶石は模造品だつて？ ハハハ。そうかも知れないが模造品で結構だよ。頂戴する分には差支えなからう。ナニ、皆呉れるから生命だけは助けてくれか。ハハハハ……

…それは時と場合に依つては助けてやらない事もないが、それじゃ王君ワンに濟まない事になるんだ。王君からの電話に依ると君は目下北平ペーピンでヨボヨボしている白系露人の頭領、ホルワツト將軍の秘書役だったが、日本の田中内閣が潰れてから、同將軍を支持する国が無くなったので見切りを付けて、共產軍の方へ寝返りを打ったサイ・メイ・ロン君に相違ないというんだ。それから君はツイこの頃になつてG・P・Uゲー・ペー・ウーの遊離細胞となつて、上海シャンハに流れ込んで来ると間もなく、最近上海で國際スパイ兼、排日団体の首領として売り出している、青紅嬢チンオンの一乾児こぶんとなつたもので、Rの四号というのはヤツパリ君の事らしいという王君の報告だがね。

……ところでそのRの四号君が、ドレ位の腕前を持つているかということとは、今云う通り経歴すじみちがヤヤコシイからサツパリ判然わかついていないんだが、とにかく一当り当つて焦点フオカスを合わせてくれ、トランクの中味もまだ突止めていないが、近いうちに日支關係が緊張するのを見越して、上海の巨商黄鶴号おうかくこうから、長崎の支店へ送るべく青紅嬢に委託された貴重品らしいという話だったがね。ハハハ。王君はナカナカ眼が高いよ。

……ナニ……王君の正体は何だつて聞くのか。……フフフ……それを聞いてドウするんだい。王君の親友が吾輩なんだから、大抵想像が付くだろう。序ついでに吾輩はこの船の機関長

でも何でもない。だから最前から饒舌り続けた経験談なんかは、ミンナ受け売りのゴツタ雑炊だ。トランクの中味がわかるまで君を釣つとくためのヨタだった……と云つたら、尚の事、焦点がハッキリしやしないか。ハツハツハツ……ナニ……日本のスパイ船……僕が参謀将校……ウフウフ。当らずと雖も遠からずと云つておこなね。

……フーン。何だつて、僕に秘密の相談がある？ 何だ。云つて見たまえ。ナニイ。聞いている者が居ちや話せない。ウン。よしよし……。オイ。ボン州。こいつのオモチャを取り上げてくれ。モウ外に何も持つていないな。万年筆と名刺だけか。よしよし。それだけ残しとけ。後で書かせる事があるかも知れないから……それから手前等はこの室を出て、扉をピツタリと閉めておけ。用があつたらベルを押すから……ナアニ。俺の事は心配するな。この坊ちゃんの話がよくわかつていらつしやるんだからな……。

サア。誰も居ない。鍵穴まで閉がつているんだ。その秘密の相談というのを聞こうじやないか。何だ何だ。何だつて服を脱ぐんだ。ハハア。裏に縫い込んだな。G・P・Uの指令か。フウン。暗号だな。ウム。とうとう白状したね。日本の参謀本部が喜ぶだろう。青紅嬢が日本の諜報勤務を馬鹿にし過ぎたから君がコンナ眼に合うんだよ。

……何だ。まだ着物を脱ぐのかい。まだ何か縫い込んであるのかい……アツ……。君は

婦人ですな……。

イヤツ……これあどうも……最前さつきから平気で色眼鏡を外したり、僕と一緒に男便所へ入ったりされるから真逆まさかと思つておりましたが……ハハア……貴女あなたがサイ・メイ・ロン君の青紅嬢で、同時にRの四号君。ウムムム。チツトも知らなかった。イヤもう解りました解りました。ズボンは脱がなくなともいいです。わかつております……アツ……。

……ま……待つた待つた。待つて下さい。ここじや困ります。危険です危険です。実際危険なんです。ま……ま……まあ着物を着て下さい。発見みつかると都合がわるい……早く服装を直して下さい。そうそう。それからの御相談です。そうそう……イヤ。Rの四号君が貴あ女なだと解れば、一番喜ぶのは日本の参謀本部でしょう。G・P・Uの指令系統がわからなくて困つているらしいんですからね。貴女に敬意を表さして下さい。そうして一つ僕と握手して下さい。これでも理解わかりは早いつもりです。へへへ。そうですそうです。これでも金儲けのために働いているコスモポリタンですからね。世界中が独裁政治フアンストと共産政治ボルセビキの二つに別れる……ドチラも金が儲からないとあれあコスモポリタンになった方が便利ですからね。世界中のインテリはみんな一種のコスモポリタン式エゴイストですからね。そうです。そうです……貴女と握手すれば随分大きな金儲しほが出来ます。

済みませんがモウ一度腰をかけて下さい。ナア二。外に聞えるもんですか。外の雑音の方が高いのですから……電流でんきが来ているなんて云つたのは嘘の皮です。寝台の下には誰も居りません。御心配なら僕の椅子を取り換えて上げましょう。御覧なさい。コードも何も付いていないでしょう。ハハハ……。……いいですか……。耳を貸して下さい。とりあえずここで必要な事だけ話しておきますから。いいですか……。この船の正体は最早もはやお察しでしょう。日本の参謀本部の無電一本でどこへでも行く船なんです。第一長崎へなんか行きやしません。嘘だと思われるならば甲板デッキへ上つて、羅針盤コンパスを覗いて御覧なさい。チャンと大連たいれん行きのコースを取っておりますから。実は大連からツイ今さつき無線電信が這入りましたのでね……。この珈琲茶碗コーヒーの内側に電文が暗号で書いてあります。この通り飲み残りを傾けると同時に出て来るでしょう。……。あつちで又、似寄りの仕事があるのです。やつぱり王君のような人間が網を張っておりますからね。……。そればかりじゃない。貴女が専門家ならすぐに気が付くでしょう。この船がタツタ今出しかけている速力に……。二十一節ノット一パイに出しかけているところですからね。

……。ね。貴女と僕の立場が容易でない事がわかつたでしょう。国事探偵としての貴女と僕の地位は、大将と兵卒ぐらい違うのですが、ここ暫くの間は僕に任せて下さらないと困

りますよ。いいですか。貴女は依然として遊離細胞のR四号君ですよ。そのつもりで何でも僕の云うなりになつて下さらないと……そうそう……それじゃいいですね。

とりあえず甲板デッキの部屋へ帰りましょうね。あそこでユックリ御相談しましょう。ナアニ。この船の中では船長以下が僕の命令通りに動きましますから、心配は要りません。問題は大人たいれ連れんに着いてからです。大連せいしんから清津せいしんへ抜けて、あそこから浦塩うらじおへ抜ける途みちがありませんから……露西亞語ロシアならお手のものでしよう……ハラシヨ……済みませんがそのベルをモウ一度押して下さい。いくつでもよろしい。デッキの部屋へ二人分の寢床を支度させましょう。へへへ……オイ。ボン州、銀州、エテ公。チョット来い。用がある……ウン。扉ドアを閉めてこつちへ這入れ……。こいつを押さえろツ……その万年筆を取上げろツ……毒瓦斯ガスらしいから……。

アハハ。どうです。身動きが出来ないでしょう。僕の部下は素早いでしょう。ハハハ。お断りしておきますが、今まで云った事はみんな嘘です。この船は国際的レンペン船でもなけあ、日本の諜報船スパイでも何でもありません。貴女はまだ御存じないでしょうが、日本と支那の間を、荷物船カーゴボートに化ばけて往復しているG・P・Uの海上本部K・G・M号です。そうして僕はこの船の船長ですよ。わかりましたか。ハハハ。……貴女がG・P・Uを裏切つて、日

本に隠れようとしていることを看破した王君が、取りあえず僕に引渡したんですが、お気の毒ながら……ナニ……僕の国籍？ 名前……へへへ。今は日本語を使っているから日本人ですが、浦塩へ這入れば露西亞人ロシアで通りましょう。こいつ等は皆日本語のわかる朝鮮人ですが、国籍を持つている奴なんか一匹もこの船に居ないんですよ。……まあ……そんな事はいつでもよろしい。……ナニ……僕の日本語が巧妙過ぎる？……大きなお世話だ。お前さんの露西亞語ぐらいのもんさ。東京の寄席には漫談をやっている露西亞人が居るんだぜ。……ニチエウオ……オットその万年筆はソーツとその棚の上に置いてけ。落ちたら大変だぞ……そいつが恐ろしかったから呼んだんだ。序ついでに着物を引つ剥はいでくれい。ナイフで切り裂いても構わない。そうだそうだ……。

ハハハ……どうだ、驚いたか。女だろう。いい肉付きだ。

ナアニ……可哀相も糞もあるもんか。スツカリ引つ剥はがしてしまえ。着物はこの寝台の上と並べろ。靴も……ズロースも……俺が後で検査してやるから。まだ別に日本内地のG・P・Uの名簿と暗号の鍵を隠して在る筈だからな。コイツ奴め、日本の参謀本部に売り付けるりようけん了簡りようけんで持って来やがったんだ。危ねえの何のつて……。

オット。痛い目を見せなくともいいんだ。女スパイには經驗おぼえがあるんだ。これ位の女に

なるとモウこの上に泥を吐く気づかいはないんだ。それよりも身体中からだをスッキリ調べろ。喰い付かれるなよ。誰か片手で頭の毛を掴んでろ。それからスパナか何か持って来て口をゴジ開けるんだ。開けなけあそのナイフを噛ませて見ろ。強情な女あまだな……そうそう。金歯かアマルガムがあつたらペンチで引っこ抜くんだ……血だらけで見えないか。懐中電燈を出せ。俺が見てやる……ウム。みんな綺麗な歯だ……よしよし……今度は鼻の穴だ……イイカ。唇をシツカリつま抓んでろ。唾液つばでも吐きやがると穢きたないからな……ちよつとこの電燈を持つてくれ。動かすんじゃないぞ。反射鏡を使うんだから……ウム。何も無いと……耳の穴はドウダ。ウム。よしよし。チャント掃除してやがる。学生らしくもなかったな。ハッハッ。髪の毛の中はドウダ。何も無いか。よしよし。それでよしと……。そんならモウこの剥身むきみに用は無いな。ハラシヨ。貴様達に呉れてやるから、そつちへ持つて行って片付けろ……ナニ……。

何だ何だ……モウ一つ云う事がある。云つてみる。ハハア……貴方がたを疑つて済まなかつた。G・P・Uを裏切つたのじゃない。裏切つた形にして東京の×××大使館へ重大な密書を運ぶんだ……成る程……密書の内容は？……ウム。上シャンハイ海ハイの排日で……上海の排日で……それがどうした……オイ……シツカリしろ……サ……ブランデーを飲ましてや

る……シツカリしろ。上海の排日がどうした……ウム。上海の排日で、世界大戦の導火線を作る見込みが充分に付いた……×××は他の国と同盟せずにキャスティングボードを握ってくれ。……御要求の利権を承認する旨、本国へ取次いでくれ……何だ。それあ南京政府の密書か……そうじゃない。蔣介石しょうかいせきの仕事か、フフウ、そいつあ問題が大きいぞ。……本文は万年筆の鞘さやに塗り込んである。これか……ナル程。エボナイトじゃないわい。パラフィン塗りの紙細工か。ウマク細工したもんだ。……ウン。これが密書か。有難い有難い。コイツはドエライ金になるぞ。尤も若槻内閣へ売っちゃドツチミチ損だが……。ウム。ヤツト本音を吐きやがった。……オイ姐ねえさん。この船を密輸入目当ての海賊船たあ思わなかつたかい。それよりもこの王さんの顔をモウ見忘れたのかい。チツトばかり細工はしているが、あんまり見識みしり甲斐がいがなさ過ぎるじゃないか。眼付きを見ただけでも日本人とわかりそうなもんだが……アハハハ。姐ねえさんにも似合わない。K・G・Mが海牛丸の洒し落やれと気付かなかつたばつかりにスツカリ底をハタイちやつたね。フフフ……。

ああくたぶれた。焦点フオカスが合わないので恐ろしく手間を喰わせやがった。女はドウモ苦手だ……ハハン……。モウいいから片付けちまえ。ホラッ……喰い付かれるなどタツタ今云つたじゃないか。見ろ……。

……オイオイ。扉^{ドア}を開け放して行く奴があるか。馬鹿野郎。ハツハツ。アトは汽^か鐘^まへブ
チ込むんだぞ……ハツハツハツハツハツハツハツ……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

底本の親本：「冗談に殺す」春陽堂

1933（昭和8）年5月15日発行

※底本の「上海《シャンハイ》をを」「上海《シャンハイ》にに」をそれぞれ、「上海《シャンハイ》を」「上海《シャンハイ》に」に改めました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

焦点を合せる

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>